

うしろからうむを言はず秋の暮

藤田湘子

私なら「後」や「有無」と漢字で書いてしまいそうだが、一句に「う」の頭韻を重ね、視覚と聴覚にやさしい雰囲気詠い出し、「言はず」と引き締まるような緊張感を持たせる。そして、下五「秋の暮」で、広々とした景色と歴史の彼方へと連想を広げさせてくれる。

かつて飯島晴子が「うしろからいぼたのむしと教へらる」と詠んでいたのが何故か思い出される。全く違った二句なのだが、俳句の連想力とは不思議なものである。

初心の頃、何かという後ろ向きだと戒められた。確かに、いつまでも振り返ってばかりではいけない。自分を追いかけてくるもの、七十三歳、世紀末。

十月には「鷹三十五周年記念大会」を開催した。

1999年(五二作) 第十一句集『てんてん』 鑑賞・轍郁摩